

中国における谷崎文学の翻訳と受容の変遷

—作品の選択と評価を踏まえて—

尹 永順

(神戸大学大学院・国際文化学研究科博士後期課程)

Translation and reception of literary works are generally influenced and restricted by the socio-cultural background and literary norms existing in the target language country. Literary works are usually translated in conformance to the ideology of target language country. Meanwhile there also has been different evaluations in accordance with the socio-cultural background of target language country even if it is the same author or the same work. Tanizaki is a typical Japanese writer of the Aesthetic movement whose works have been translated and accepted in China during three periods. During 1928-1941, under the Shanghai Concession circumstances, much attention was given to the idiosyncrasy of Satanism that had a considerable influence on modern Chinese literature. After 1980, under the influence of left wing's thought and disputes between politics and literature, Tanizaki was actually accepted as an antiwar writer; his aestheticism was analyzed because of its practical and pedagogical significance. After 1994, as China's politics became relatively open, Tanizaki's works were appreciated more favorably and the objective and literary concept of aestheticism was approved.

1. はじめに

「文化的転回 (the cultural turn)」は翻訳をコンテクスト、歴史など文化的環境のもとで考察し、翻訳と文化との相互作用に注目する(マンデイ2009; 196)。ルフューヴルによれば、「翻訳は起点テキストのリライト (rewriting) である」(Lefevere 1992: VII)。リライトにはほかに編集、批評、選集編纂などが含まれる (ibid:9) が、「全てのリライトはその意図を問わず、特定のイデオロギーと詩学、及び特定の社会において何らかの方法で機能する文学の操作を反映する」(ibid: VII)。このような操作は主としてイデオロギーと詩学によって左右される。一般的に、イデオロギーと支配的な詩学に抵抗するような文学作品は抑えられ、それに適合した作品の翻訳と受容が認められる。さらに、特定の時期におけるイデオロギーと詩学に受容可能な文学作

品に仕立てるために書き換えられることさえある (ibid)。そのため、「一作家への評価は、受容国たる同じ一つの外国においても、時代によって変化」(大塚1977:93)し、数回にわたって翻訳されたテキストを比較することによって、「時代から時代への受容国の趣味の変遷」(ibid:121)を追求することができる。このように、ある作家の作品の翻訳と受容の仕方は受容国の社会文化背景(イデオロギー)や文学状況(詩学)と深く関わると考えられる。

本稿は日本の耽美派作家谷崎潤一郎(以下谷崎と略す)文学の翻訳状況、解釈と評価を中国の社会情勢や文学状況と関連づけ、時代の変化に従って考察するものである。社会性と功利性を重んじる中国の伝統的な文学観のもとで、道德功利性に一切背を向けた谷崎文学がどのように解釈、評価され、受け入れられてきたのかを検討する。

中国では谷崎の作品は1928年から2007年⁽¹⁾にわたって翻訳されてきた。本稿は中国の時代背景、文学状況の変化と谷崎作品の出版時期に基づいて、1928～1941年(第一時期)、1980～1992年(第二時期)、1994～2007年(第三時期)という三つの時期に分けて考察する。さらに、谷崎が純文学の作家であることを考慮に入れ、主に代表的な翻訳者の序文(もしくは編集者や監修者の「序に代えて」)や研究論文を踏まえて考察し、一般読者は対象外とする。翻訳者による序文は、「原作や原作者に対する訳者の理解や解釈の諸相、訳者はその作品や作家のどの点、どんな面を強調しているのか、その訳が出た当時の受容国の文学状況、読者公衆の趣味、流行などを知る上に、貴重な手がかりとなる」(ibid:121)し、研究論文の執筆者は殆どが大学教員(大学教員を目指す大学院生も含む)や文学研究者であるため、これらによる評価はどの作品を、どのように学生に学習させるかといった作品の受容を左右するような影響力を持っていると考えられる。第一時期には研究論文を見出すことが困難であるため、主に翻訳者による序や同時代の知識人の評価を踏まえて考察する。第二時期と第三時期には独立した研究論文(2010. 3. 13現在:113本)⁽²⁾が発表されているため、翻訳者による序文と研究論文を参照する。

研究方法としては、三つの翻訳時期それぞれの社会情勢と文学状況を確認した上で、それとの関わりにおいて翻訳出版された作品と翻訳者による序文や研究論文をもとに中国における谷崎文学の翻訳状況と評価の変遷を見ていく。

2. 谷崎文学と中国における耽美派

谷崎(1886～1965)は日本耽美派の代表的作家である。耽美派⁽³⁾は西洋に由来する文芸思潮であり、「写実ではなく空想を、倫理的価値ではなく美的価値を、内容とともに技巧的完成を求めた文学流派であり、その芸術観は芸術至上主義的であり、享楽主義及び快楽主義を信条とする」(浅井・佐藤 2000:129)。耽美派が西洋から東洋に伝えられてきた時、同じく儒教文化圏に属し、古くより互いに影響し合ってきた日本と中国における境遇は異なっていた。日本では、明治40年代を中心に耽美主義文学が反自然主義の立場で登場し、当時の文壇を賑わせた。この流派については毀誉褒貶が激しいが、耽美派の存在と谷崎が耽美派の代表的作家である事実は誰もが認めるだろう。

本稿は作風の変化により、谷崎の文学的活動を青年期・中年期・晩年期に分ける。青年期

(1910年～1927年)は『刺青』が『新思潮』に発表された1910年から『蓼食う虫』が発表される前の年までである。この時期は「肉体的恐怖から生ずる神秘幽玄、肉体上の残忍から反動的に味み得らるる痛切なる快感」(原文ママ)⁽⁴⁾や悪の底に潜む美を追求するような悪魔主義的色彩が強い作品が中心である。代表作としては、『刺青』(1910)、『麒麟』(1910)、『悪魔』(1912)などが挙げられる。中年期(1928年～1948年)は関西移住後、関西の伝統文化と古典美、さらには関西女性の魅力を自覚する日本回帰の時期である。西洋崇拝から日本回帰を遂げた転換作とされる『蓼食う虫』(1928)をはじめ、『春琴抄』(1933)、『細雪』(1942～1948)などの名作を発表した。晩年期(1949年～1965年)は、性不能で苦しむ老人像が現れる『少将滋幹の母』(1949)の発表をはじめ、『鍵』(1956)、『瘋癲老人日記』(1961～1962)などの作品を残した。この時期は、迫ってくる死への恐怖から女性の肉体を求めたり、倒錯的性欲や自虐的な老人の性欲を描いた作品が代表的である。

中国でも、20～30年代を中心に、西洋と日本から耽美主義が受け入れられてきて、小さな翻訳ブームを引き起こし、さらには中国の知識人たちにある程度影響を与えたが、中国には明らかに「耽美派」と呼ばれる作家と文学団体は現れなかった⁽⁵⁾。文学主張が耽美派に最も近い創造社や海派の小説家たちは特定の時期に、特定の地域において活動していたが、10数年しか続かず短命に終わった。この類の作家や文学団体は多くが中国近代文学の開祖とされる魯迅の論敵にされたり、新中国の成立後、50～60年代の反右派闘争や文化大革命で批判の対象とされた。これは、「中国の、一流文学を持って自任するものは、伝統的に、政治との関連において文学の存在意識を自覚し、何らかの面で文学と政治とを関連付けようとする意識が強い」(鈴木1978:43)からである。中国では古来「文を以て道を載せる(文以載道)」文学が正統的な文学とされてきた。「道」については歴史時期や社会情勢の変化に伴い、異なる解釈と理解がなされていた。例えば、封建社会では「道」は封建社会を守るための儒家思想であり、近代以降は「救国、国民改造」のためのものであったように、文学は常に政治思想と政治闘争の道具として利用されてきた。このように、歴史的に見ると、中国は耽美派文学の発展に不利な環境に置かれていると考えられる。

このような背景で考えると、中国では「谷崎文学に対し、まったく冷淡な態度をとっている」(銭2002)はずであるが、代表作『春琴抄』には8種類⁽⁶⁾の中国語訳があるように、「冷淡な態度」を取ったとは考えにくいだろう。中国において、谷崎文学の翻訳と受容を扱った研究には曾(2003)、張(2007)、蔡(2008)などが見られるが、中国の社会背景や文学状況は殆ど無視されている⁽⁷⁾。そこで、本稿は谷崎文学の翻訳が現れた原因を中国の社会背景や文学状況と関連付けて解明し、時代の変化に伴う谷崎文学の受容の実態と変遷を考察する。

3. 谷崎文学の翻訳と受容

谷崎文学が初めて中国に紹介されたのは1918年のことである。周作人(日本文学研究者、文学者)が北京大学文科研究所小説研究会で「日本近三十年小説之発達」というテーマで講演を行い、日本文学の流れを紹介した。耽美主義については、自然主義に反発して現れた新主観主義に属する「享楽主義」という用語を用いた。「この流派では、永井荷風が最も有

名である。(中略)谷崎潤一郎は東大出身で、荷風と同一流派に属し、頹廢的な芸術的傾向がある。名作『刺青』、『悪魔』にその特徴が見える」⁽⁸⁾と耽美主義と谷崎が紹介された(周1941:263-294)。そして、10年後の1928年に翻訳された『富美子の足』は中国における谷崎文学の翻訳の始まりとなる。

3.1 1928～1941年の翻訳と受容

3.1.1 社会情勢と文学状況

1919年に北京を中心に「社会改造、思想改造」を目指して新文化運動が起こされた。「当時の提唱者たちは自民族の古典文学に対し、軽視するかあるいは一律に否定する態度をとり、人々の視線を全面的に西洋に向けさせた」(唐1986:19)。新文化運動直後のわずか数年の間に西洋の様々な文芸思潮や哲学思想が相次いで中国に紹介され、異なる文化や文芸思潮に影響された作家群が自ら文学団体を結成する。1921年から文学団体が雨後の竹の子のように結成され、外国文学の翻訳を積極的に行った。

一方、1925年から1927年にかけて、様々な事件が起こり、社会情勢が悪化していった。さらに、新文化運動の影響力も減衰し、分化を余儀なくされた。1927年の4.12反共クーデターをきっかけに、悪化する社会情勢に迫られ、知識人たちが各地から大量に上海に流入し、上海が次第に中心的な位置を占めるようになった(邱2003:688)。

当時上海は租界(1845-1943)として治外法権が認められていたため、戦乱中にあるほかの地域より安定していた。列強諸国の資金や進んだ技術の流入によって、上海は資本主義経済が急速に発展し、国際的な大都会となった。特に、20年代後半期から30年代初期にわたって、経済発展が頂点に到達し、経済の中心となった。さらに、印刷の機械化が進むにつれ、出版事業は迅速な発展を遂げ、全国の半分以上の本格的な出版社が上海に設置され、商務印書館、中華書局など大手出版社は殆ど上海に集中していた(ibid:686)。そして、多くの外国人が上海に移住し、建築様式から生活様式や娯楽にまでも変化がもたらされた。上海は中国と西洋の文化交流の場として、西洋文明を受け入れながら変容していった。

このように、上海は当時中国で唯一耽美主義が存在するような環境が備わり、直接外国の耽美主義に触れることができる土壌であった。耽美主義が西洋から中国に紹介されたのは、20～30年代の上海の都市文明が発展の頂点に達したと密接に関わる(李2000)。都会化の進んだ上海において社会情勢に迫られ苦しむ知識人と、欧米や日本の留学から帰国した知識人たちが合流して、耽美主義を発展させた。「中国文壇の大半は日本留学生によって構築されている。創造社の主要メンバーは日本留学生で、語絲派も同じである。ほかに、欧米から帰国した有能者や国内の新人の一部も功績をあげているが、前の二派の影響力にはかなわず、またその影響を深く受けている。中国の新文芸は日本の洗礼を深く受けて、日本文壇の害毒も大量に中国に流されてきた」(郭1989:53-54)。こうして、日本の耽美派作家谷崎も西洋の耽美主義思潮とともに中国に受け入れられた。

耽美主義の翻訳と紹介に大きく貢献したのは、創造社(1921-1929)、浅草-沉鐘社(1922-1934)、彌洒社(1922-1927)、南国社(1926-1930)、獅吼社(1924-1930)、緑社

(1933-1934)、新感覚派(1928-1935)を含む文学団体である。例えば、創造社(1922年退社)と南国社の田漢や獅吼社の章克標は谷崎文学の主な翻訳者である。これらの文学団体や作家たちは全て上海を基点として活動し、耽美主義作家の作品を大量に翻訳しただけではなく、自らの作品もその影響を受けて、耽美主義思潮の傾向が見られた。

しかし、1937年の8.13戦役で上海郊外が日本軍に占領されると、知識人たちが大量に上海を離れ、上海は文化の中心的地位を失い始めた。さらに、1941年の太平洋戦争をきっかけに日本軍が租界に進駐し、租界の「中立」状況が崩れ始め、やがて衰退していった。10数年間発展してきた耽美派もその土台が崩れるやいなや姿を消してしまい、ついに幕を下ろした。

中国における耽美主義的傾向のある作家は不遇であったと言えよう。文学研究会など人生のための文学を提唱する左翼理論家たちに否定批判され、特に左連の発起者である魯迅の論敵にされ、批判された(例えば、邵洵美、施蜚存、葉靈鳳、郭沫若、田漢、成仿吾、張資平、林徽音など)⁽⁹⁾。新中国成立後の反右派闘争や文化大革命において反革命の罪に問われた人(田漢、章克標、邵洵美など)も少なくない。

一方、中国全体を見ると、「芸術のための芸術」や「無功利性」の文学を唱えた作家たち(例えば創造社)は1925年から左旋回を遂げ、多くが政治的にも、文芸思想の上でも、革命家への道をたどり始めた。1927年にはプロレタリア文学を提唱する段階へと進み、1930年には左翼作家連盟が上海で成立した(唐1986:34)。1937年以降は抗戦と文学をどのように結び付けるかが主要な課題とされた。さらに、ロシア10月革命によりマルクス主義が中国にもたらされ、30年代初期を中心にソビエトブームが続き、ソビエト文学が大量に翻訳、紹介された。こうした環境下において、日本の作家は「武者小路氏と菊池氏」⁽¹⁰⁾や厨川白村の文芸理論が最も多く翻訳された。

3.1.2 谷崎文学の翻訳と翻訳者による評価

1928年の『富美子の足』、『痴人の愛』から、『悪魔』が出版された1941年の間、合わせて19作品が翻訳されたが、1939年に翻訳された『春琴抄』⁽¹¹⁾を除く全ての作品は上海の出版社から出版された。この時期は主に翻訳者の序文、及び同時代の知識人の評価を踏まえて考察する。

『痴人の愛』(1928)の翻訳者楊騷は、谷崎は「一流作家」であり、「幻惑的な空想世界、空想的な構想、主観的情熱、誇張した色彩と文章表現力で読書界の反響を呼び」、芸術的特徴は「マゾヒズム」であると指摘した。『痴人の愛』は男性を嗜虐的に扱ったり、男性を服従させようとする異常な女性を描いた傑作であると評価した。

『谷崎潤一郎集』(1929)の翻訳者章克標は、谷崎は「ずっと一流作家として位置づけられ」、「ほかの作家には追い付かないもの、この時代の核心的なものを掴んでいる」とした。作品の基調となるものは、「官能美を追求する耽美享楽流派の思想」である。谷崎には現実と人生を乗り越えた豊富な空想と夢幻の世界がある。「彼の文学には革命や思想は存在せず、感情、情緒だけが溢れている」と人生的、社会学的な文学観ではなく、耽美主義的視点から捉えている。そのうち、『悪魔』は病的な官能美と悪魔主義的傾向、及びマゾヒズムの変態的な心理

を表現した作品で、『富美子の足』はマゾヒズムの極致に達した作品であるとした。

『春琴抄』(1936)の序において、翻訳者の陸少懿も谷崎の「日本文壇における位置づけ」を承認した上で、「谷崎は日本で数多くの賛美者を持っているが、孤独である。一人で自分の芸術の域を行き来している」と評価した。『春琴抄』(1939)の翻訳者儒丐は、谷崎は「日本文壇の大御所の一人であり、世界に知られている文豪でもあり」、「彼の創作はその独自性から他者の追隨をゆるさない」と両者とも谷崎文学の独自性を強調した。

以上のように、4人の翻訳者による評価をまとめると、いずれも谷崎を「一流作家」と認め、「他人の追隨を許さない」特異性を指摘し、マゾヒズム、退廃的な官能美など耽美派の視点から無批判に受け入れていることが分かる。

ほかに、1934年に田漢⁽¹²⁾が李漱泉というペンネームで翻訳した『神と人との間』がある。序文では、まず「独特な天才作家」谷崎は近代日本青年の心の深くにある特徴を掴んでいるため、ずっと愛読、敬慕されてきた、とほかの翻訳者と変わらぬ評価を下した。しかし、谷崎の作品における「善悪美醜は階級性があるため、谷崎の芸術を鑑賞する際には『消毒』を行うべきである」と読者に呼びかけている。さらに、谷崎が病的な、変態的な性欲の世界に溺れたのは、他ならぬ資本主義という社会と制度のせいである、と資本主義を批判する視点から捉えている。1930年前後に左旋回を遂げた田漢の芸術的な主張が率直に述べられていると考えられる。

3.1.3 谷崎文学の評価

次は、主に周作人、豊子愷、張若谷、魯迅を取り上げて、翻訳者以外の同時代の知識人の谷崎に対する評価を考察する。

最初に谷崎を中国に紹介した周作人は散文『冬の蠅』(1936)などでも谷崎に触れた。随筆が堪能な周作人は谷崎の「『他虐狂』的変態心理を描いた」小説よりも随筆が気に入ったようである⁽¹³⁾。谷崎の随筆は、「その文章は固より立派なものであるが、その思想が甚だ充実していた」。『陰翳礼賛』と『東京をおもふ』は「いずれも百数十頁からの長編なるに拘らず、一気に読み了ることができ、随処に会心の話に出会う」。さらに、単なる印象から見ると、「谷崎氏は郭沫若のようだし、永井氏は郁達夫に生きうつしだ」と、谷崎と創造社の共通点を指摘した。

周作人の随筆にも『東京を懐ふ』(1936)という作品があるが、これを執筆する際に、谷崎の『東京をおもふ』がすぐ思い浮かんだとされる。『入厠読書』(1935)においても、『陰翳礼賛』の『厠のいろいろ』を取り上げ、「谷崎氏は確かに一個の詩人だ、だからかくもうまくいっているのだ。多少華飾な處があるにしたところが、それとてただ文字のうへだけのことで、云わんとするところは確かに尤もである」(原文ママ)と賞賛した⁽¹⁴⁾。

豊子愷(漫画家、散文家、翻訳家)は『源氏物語』を中国語に翻訳する際、数十種類の参考書を読んだが、谷崎の現代語訳は分かりやすく、古文に忠実で、紫式部の持っている風格も再現しているので、最も巧みな翻訳であると評価した(豊 1983:440)。『読「読縁縁堂随筆」』(1946)⁽¹⁵⁾において、豊子愷は谷崎に「こども好き」と評価された点を欣然として受け止め、中国では「大人」たちはみな名利を追い回し、自分のような「子ども」の書いた文章を読む余裕がないが、「過去の敵国に知己がいるとは実に特別な光榮である」と感無量で語っている(ibid:

276-278)。

張若谷(小説家、文学評論家、翻訳家)の『从囂俄到魯迅』に「谷崎潤一郎的富美子の脚」が収まり、『谷崎潤一郎集』(章克標訳)の『富美子の足』を読んだ感想が書かれている。「谷崎は官能享樂に耽溺したデカダンスの主張者で、官能と変態的な性欲を描く名手」であり、女性の官能美の賞賛者でもある。『富美子の足』を読むと、女性の足を崇拜したい気持ちが思わず湧いてくる。谷崎の足に関する緻密な描写はほかの日本人作家のようにまとまりがなく、些細な印象を与えず、富美子の足に長く留まりたくなると、足の描写を高く評価した。

周作人の兄の魯迅(小説家、翻訳家)は1921年8月に周作人宛の手紙において、「張鳳挙が今日来て、谷崎潤一郎をひどく非難した。その意見はわれらとほぼ同じである」と書いた(魯 2005:413)。「谷崎潤一郎をひどく非難した」という意見が魯迅、周作人とほぼ同じであることから、魯迅の谷崎への評価と、後ほど周作人が谷崎の『『他虐狂』的變態心理を描いた』小説よりも随筆を好んだ理由が分かってきたと考えられる。

ほかにも、谷崎文学への崇拜や谷崎文学を読んだという根拠が多く残されている。翻訳者の田漢と章克標が谷崎の影響を受けているほか、創造社の郁達夫は谷崎の愛読者で、葉靈鳳(1925年に創造社参加、のち新感覺派)は、『陰翳礼讃』はデカダンスであるが、興味深いと評価し、作品『第七号女性』では女主人公が『谷崎潤一郎作品集』(章克標訳)を手にとっている。獅吼社の徐光焘も谷崎の愛読者である。新感覺派の施蛰存は知人への手紙で谷崎の影響を受けていると認めた。そして、張愛玲も『忘不了的画』において、『神と人との間』の芸者について述べている。

この時期、翻訳回数が多い順として『麒麟』が4回、『富美子の足』が3回、『春琴抄』、『刺青』、『悪魔』、『お艶殺し』、『二人の稚児』が2回ずつである。上海という特殊な環境において、悪魔主義的色彩の強い作品を中心に翻訳され、翻訳者の序文では谷崎文学の「他者の追従をゆるさない」特異性が強調された。そして、殆どが悪魔主義の文芸思潮を肯定し、耽美派作家としての谷崎の文学を客観的に捉えて評価した。無論、資本主義批判という視点や、「変態心理を描いた」小説より随筆を称賛する見方もあったが、谷崎への批判は魯迅だけである。

1943年に租界が接收され、租界の歴史が終わる。終戦後の一時期は中日関係の悪化、文人関係の疎遠等の歴史的要因によって日本文学の翻訳が殆ど途切れる。その後の反右派闘争、文化大革命に伴い、外国文学の翻訳と紹介は下火になってきた。1951年と1954年には全国的翻訳工作会議が開催され、翻訳の計画性、制度化、組織化、翻訳の質の問題を検討し、いくつかの国営出版社を外国文学作品の主な翻訳機関と指定して、国家レベルで翻訳作品の選択から出版までを統制するようになる。特に、1954年の会議では、今後は「封建階級とブルジョアの作品」を含む外国の全ての優れた文化遺産を紹介すべきだと指摘された(孟・李 2005)。しかし、実際には政治イデオロギーの影響で、70年代末までは主に被圧迫国家の「革命的」、「進歩的」、もしくは、「社会主義現実主義」の文学作品が多く翻訳された。日本の作家は、小林多喜二の作品が多く翻訳紹介された。

こうした中で、1957年に章克標訳の『細雪』が上海新文芸出版社から出版された。出版の経緯については章克標の自伝『九十自述』に次のように述べられている。「建国初期、上海新

文芸出版社から日本小説の翻訳を依頼された。様々な作品をひと通り読んで、谷崎潤一郎の原作『細雪』を選定した(章 2000:88)。その後、1978 年末の改革開放の政策が打ち出されるまで谷崎作品の翻訳は行われなかった。

3.2 1980 年～1992 年の翻訳と研究

『春琴抄』が翻訳された 1980 年から、『陰翳礼讃』が翻訳された 1992 年までを第二時期とする。この時期には 14 作品が翻訳された。1980 年代以降独立した研究が発表されたため、これ以下は主に翻訳者の序文と研究論文を踏まえて考察する。

3.2.1 社会背景と文学状況

1942 年に延安で行われた『延安の文芸座談会での講話』(『文芸講話』と略す)で毛沢東は文芸より政治を優先し、文芸は政治に奉仕すべきであるという文芸政策を提出した。当時の延安という特定の条件下で行われた「文芸講話」はそれ以降中国の全ての文芸活動の金科玉条とされた。その後の文化大革命はそれを極端にまで発展させた。文化大革命の終了後、文芸講話の政治的影響力は次第に失われてゆき、1978 年末の改革開放政策により様々な領域において変化が起こり始めたが、左翼的思想傾向の影響下で、文芸と政治をめぐる論争は 1985 年あたりまで続いた。その一方、改革開放直後、西洋文明を全般的に受け入れる風潮が現れ、1983 年にはブルジョア的な反精神汚染運動が起こった。1984 年 12 月末の中国作家協会第 14 次会員代表大会では、今後は「百花斉放、百家争鳴」の方針を守り、「創作の自由」を保障するとの提案があった。しかし、1987 年初期のブルジョア自由化反対の闘争は再び文芸界の自由化の傾向を阻止し、1989 年の民主化運動を経て左翼傾向は 1992 年まで続いた。

文学界では、1970 年代末期から文化大革命を否定し、文化大革命がもたらした傷痕を告発する傷痕文学が一世を風靡した。さらに、文化大革命前の反右派闘争や大躍進政策時代に遡って冷静に過去を反省し思索した「反思文学」が現れる。それと同時に、民族の前途と運命を改変する改革を描いた(藤井 1997:13)「改革文学」も現れた。1985 年以降は下放の体験を持つ青年作家たちが伝統意識、民族文化心理を掘り起こそうとしてルーツ文学を唱え始めた。このように、80 年代の中国文学は傷痕、反思、改革、ルーツ文学の順に段階的に現れ、各時期ごとの主流意識と思想傾向があった。この現象は文学が政治経済と直接関わり、社会教化的色彩が強いことを示唆する(李 2000)。

改革開放の一環として文化の開放が求められ、翻訳文学を通して優れた外来文化を輸入しようとした。ソ連文学がまず多く翻訳され、翻訳文学の主流を占める。日本の資金、技術、商品など物質文化が大量に輸入されるに伴って、日本の文化、文学への理解を深めようとする意欲が刺激された。こうして 1980 年から 1987 年にかけて日本文学の翻訳が頻繁に行われた(王 2000:240)。この時期は、中国がまだ著作権関係の国際条約に加盟せず、著作権の意識が薄かったため、原作が入手できると直ちに翻訳出版することができた。これは外国文学の翻訳に利便性を与えたが、翻訳が重なることもたびたびあった。個別作家としては、ノーベル

文学賞の受賞者川端康成、及び夏目漱石や石川達三の作品が多く翻訳された。しかし、左翼思潮に影響され、とりわけ 80 年代中期までは作品の選択と評価に客観的な立場が取られたとは考えにくい。例えば、80 年代初期には「妓女」を描いた『雪国』はポルノ小説だとされ、出版を拒否されたことがある(孟・李 2005)。『雪国』さえそのような境遇に見舞われていたため、異端者である谷崎がこの時期に翻訳出版されることはなおさら困難であったろうと指摘された(葉 2005: 序)。しかし、序文において翻訳の「正当性」が述べられ、実際には翻訳されていた。

このような背景で、80 年代の作品は思想性と芸術性を兼ねて評価されたり、芸術性よりも思想性が重要視されることもあった。つまり、どのような「進歩的」な社会的意義を持っているか、もしくはどのような社会現象を批判したかといった道徳的教化の側面がピックアップされ、作品を評価する際の重要な基準となった。

3.2.2 谷崎文学の翻訳と翻訳者による評価

1980 年に文軍訳『春琴抄』が『外国文学作品提要』第一集に収録されたが、殆ど注目されなかった。1984 年に『春琴抄』(中国語訳:『春琴伝』)が単行本として出版された。翻訳者は序文において、「谷崎の文学的活動は日本軍国主義の支配下で行われたが、谷崎は日本の反動政府が国内の有志者を弾圧し、対外的には侵略戦争を発動した反動政策に抵抗する態度を取った。このような正義の立場はその作品の中に反映され、いくつかの作品は積極的な意義を持っている」と、まず反戦的態度を打ち出した。さらに、「『春琴抄』は主人公の春琴と佐助の師弟二人が一所懸命に三味線の芸に励む感動的な場面を描いた。作品は努力すれば役立つ人間になれるし、芸人は試練を受けて初めて芸術の真髓が悟れるという道理を強調した。(中略) 作者は「谷崎美学」を表現するために、小説の中に病的な心理描写を加えたが(マゾヒズム—筆者注)、以て範とするに足らず」と悪影響の側面を避け、人心を奮い立たせそうな内容だけを読者に伝えて、翻訳の必要性を強調しようとしたところに翻訳者の意図が伺える。ほかに、短編小説『小さな王国』は「当時の日本社会の現実問題を反映し、下層階級にある知識層の苦しい生活状況を暴露して、作者の資本主義制度に対する不満と社会改革を期待する願望を表した」。『青春物語』は「厳しい態度で西洋の頹廢的な思潮が、抵抗力の乏しい青年に与えた弊害を反映した」と述べた。現在の『春琴抄』の研究において、「マゾヒズム」はおそらく作品を理解するのに欠かせない要素であろうが、翻訳者はわざとそれを抑えて、教育的役割の側面だけを強調し、ほかの二作品についても、社会批判意識、資本主義批判等の視座から扱った。

この時期は『細雪』の翻訳が大きな成果を収めた。『細雪』(1985)の序において、翻訳者周逸之は谷崎が『細雪』を完成させた要因として、関西移住後の日本回帰、源氏物語の影響を指摘したが、「ファシスト軍国主義への支援を避けるため」という戦争との関わりに重きを置いた。そして、「作品の中の人物の台詞を借りて戦争への不満を表した。(中略) 当時厳しいファシスト支配下で、作者が敢えて日本国民の中日友好の願望を表したのはありがたいことである」と谷崎の反戦的態度を称えた⁽¹⁶⁾。さらに、女性の社会地位、社会進出の視座から主人公の人

物像を分析した。日本の伝統的な女性として登場した雪子については弱者として同情を寄せ、現代的な女性として登場した妙子はポジティブに評価した。その一方で、このような優れた作品でも、ドイツと日本のファシストを美化した不適切な内容があるので、批判的に読むべきであると読者に注意を喚起した⁽¹⁷⁾。

その他、1991年には孫日明他共訳の『細雪』(中国語訳:『乱世四姐妹』)が出版された。『細雪』は時代背景との関わりが薄く、「逃避の小説」(中村真一郎)であると指摘されることが多いが、この序文は標題のごとく時代背景との関わりを強調して、「文学価値が高く、時代感があふれる」、「思想的に純潔で、下品低俗な内容が見られない、世界に誇る名著」に仕上げ、当時の文学嗜好と読者の趣味に合わせようとした。

郭来舜他共訳の『痴人の愛』(1988)には『『悪の華』の悲劇』という題の序文がある。「ナオミを無邪気な少女から悪の女に堕落させた深刻な原因は日本社会における女性への差別」であり、「譲治もナオミも、日本現代化過程において西欧化の風習がもたらした歪んだ心理を持つ病的な悲劇の人物である」と日本社会と西洋崇拝を批判する視座をとった。さらに、『痴人の愛』、『小さな王国』は「社会的意義をもった、時弊を指摘した作品である」と現実社会を反映した点で高く評価された。

この時期の谷崎文学は翻訳回数が多い順に『春琴抄』と『細雪』が3回、『陰翳礼讃』と『小さな王国』が2回ずつである。これらの序文は殆ど反戦的立場、社会的意義、資本主義批判の側面をアピールした。翻訳者はおそらく翻訳の価値があること、もしくは翻訳の必要性を主張するために、当時の社会情勢や文学嗜好に合わせた序文に書き換え、中国における谷崎作品の翻訳と受容を保障しようとしたと考えられる。

3.2.3 谷崎文学の研究

この時期は谷崎文学に関する研究論文が比較的少なく、8本しか見出すことが出来なかった(CNKIによる)。そのうち、谷崎と永井荷風を中心として日本耽美派の文学的特質をまとめ、日本の伝統文学を参照しつつ芸術性と思想性の問題を検討した研究が2本あった。そして、谷崎文学の耽美主義的特質を扱い、社会と家庭背景を踏まえて各時期の代表的な作品を紹介したものが4本ある。耽美主義的特質を考察するために、取り上げた作品には『小さな王国』、『春琴抄』、『細雪』がほぼ重なっている。谷崎作品の女性像を扱った研究は1本のみである。その他、谷崎の未発表の作品を紹介したのも1本あった。これらの研究は、殆どが頹廢的な側面を批判したり、反社会的な内容を強調したりしている。

ここで耽美派特集が収録された1983年の『日本文学』第二期を紹介する。『日本文学』(季刊)は当時日本文学の翻訳と研究を扱った唯一の専門誌であった。耽美派作家として谷崎(『麒麟』と『檻樓の光』)、永井、川端⁽¹⁸⁾の5作品が翻訳された。李芒(文学翻訳家)の前言によれば、『麒麟』は「日本政府の権力者がみだりに武力を駆使したのに対する風刺であり」、『檻樓の光』は「読者たちに罪深い戦争中の日本社会が一般民衆にもたらした悲惨な運命を思い起こさせる」ため、翻訳されたと考えられる。『春琴抄』にも触れたが、とりわけ『小さな王国』は谷崎の異色作で、教師の貧乏な生活を描いた傑作であると高く評価した⁽¹⁹⁾。一方、老

夫婦が情欲に耽溺した、放蕩な性生活を描写し、あるいは舅と嫁の間の汚行を描いている『鍵』、『瘋癲老人日記』は道徳にはずれた滓ともいべきものであると厳しく批判した。

このように、この時期は谷崎を反戦作家として高く評価する傾向があった。谷崎文学の耽美主義的特質は正面から受け入れられず、作品を社会背景や社会的役割と結びつけて、資本主義や耽美主義の頹廢的な側面を批判的に受け取っている。具体的な作品は、現実社会を反映した『小さな王国』と、思想的に純潔で、反戦的立場を取った『細雪』が高く評価された。

3.3 1994年～2007年の翻訳と研究

『春琴抄』(蔡茂友訳)が出版された1994年から、最新の『春琴抄』(鄭民欽訳)の中国語訳が現れた2007年までを第三時期とする。この時期も主に翻訳者の序文と研究論文を踏まえて考察する。

3.3.1 社会背景と文学状況

1992年1月の鄧小平による南方視察の談話「南巡講話」と同年10月の第十四次全国代表大会での改革開放の再推進の指示によって「社会主義市場経済」が提起された。経済が急速な発展を遂げ、政治への関心がだんだん経済へと移り、政治的環境は以前よりかなり開放的になった。経済の市場化に伴い、社会、文化、さらには日常生活など様々な領域に変化がもたらされた。

市場経済の確立は文学の市場化、商業化を促した。さらにメディアの大衆化、インターネットの普及によって文化的環境もますます緩くなり、様々な文化形態が共存するようになった。典型的な形態として「主流文化」(国家イデオロギー文化、政府文化、正統文化とも呼ばれる)、「エリート文化」(高尚文化とも)、「大衆文化」(流行文化、通俗文化とも)があり、特に、大衆文化はすさまじい発展を遂げ、それ以降の文化発展に大きな影響を与えた(洪 1999:386)。それに応じて、文学観と文学嗜好も多様な変化が求められ、従来の「文を以てて道を載せる」文学観が見直されるようになった。80年代の文芸と政治をめぐる論争は90年代に入っては文芸と商業操作との論争に変わり、文芸と政治が離脱する傾向が見られた。この時期の作品は題材、作風、表現に多様化がもたらされ、作品は体制外の個人を対象と扱う傾向があって、80年代のような段階的に現れる主流思潮は見られなくなった。

社会生活や価値観の変化により性意識にも変化がもたらされた。「もともと文学作品にあらわれた性表現は、その時代の人人の性意識の反映である」(奥野 1974)ように、今までタブーであった「性」を扱った作品が現れ始めた。1993年に知識人の頹廢的な精神世界を描いた賈平凹の『廢都』が発表されたが、その過激な性描写によって世間を騒がせた⁽²⁰⁾。1999年からは、自分の欲望を肯定しようと試みる新世代の女性作家が登場し、話題を呼んだ⁽²¹⁾。

一方、1992年には中国が「ベルヌ条約」、「万国著作権条約」に調印し、それ以降著作権意識の向上に伴って、同一作品の数回にわたる翻訳が減少し、作品の選択に多様性と系統性を見せ始めた。80年代の初期に絶対的な優位にあったロシア(ソ連)文学に代わって英語系の翻訳文学が増えてきた。日本文学も1995年以降は出版業界の市場化のもとで経済的

利益を求めて、有名作家の作品シリーズの翻訳が多く行われた。川端康成、大江健三郎をはじめ、三島由紀夫、村上春樹などの作品がシリーズとして出版された。そのうち、村上春樹の作品は大学生を中心に大きな反響を呼び、90年代の中国の文学界に最も大きな影響を与えた。さらに、日本現代作家の作品やベストセラー作品も続々と翻訳された。

3.3.2 谷崎文学の翻訳

こうした中で、「長期にわたり禁固とされた谷崎文学もようやく雲が払われて快晴になった」（葉 2005：序）。まず、1994年に世界恋愛結婚小説叢書の日本巻として『春琴抄』が翻訳された。2000年には叶渭渠（文学研究者、翻訳家）監修の『谷崎潤一郎作品集』が4巻⁽²²⁾に分けて出版された。この作品集には以前に翻訳された作品『春琴抄』、『刺青』、『麒麟』などが再び翻訳されるほか、『蓼食う虫』や『饒舌録』は初めて中国語に翻訳され、谷崎文学の各時期の代表作が殆ど網羅されている（小説16作品と散文随筆52作）。そのうち、『瘋癲老人日記』に収まった同性愛を描いた『卍』、夫婦の病的な性を扱った『鍵』と老人の異常な性欲を描いた『瘋癲老人日記』の翻訳は削除された部分もあったが、翻訳出版自体が中国社会の大きな進歩であると言えよう。

この作品集には葉渭渠による「谷崎潤一郎の耽美的芸術特徴」という「序に代えて」がある。谷崎文学の特徴は「封建的な倫理道徳が性と愛を抑圧するのに反対し、自由恋愛の追求を基本的思想として、封建的な遺風を風刺し、人間性の抑圧に不満を表した。さらに、自我と人間性の解放を基調として、女性美と官能美に絶対的な忠誠を尽くし、従来の価値観を拒否しようとした」とまとめ、具体的な作品を取りあげ、青年期の悪魔主義、西洋崇拜から中年期の日本の古典美、伝統文化に辿り着くまでの作品の流れと芸術観を検討した。例えば、『刺青』と『麒麟』は女性の嗜虐から快感を得て、肉体の残忍から女性美と官能美を見出だした作品である。『痴人の愛』は、西洋風の女性の肉体に魅了され、従来の束縛から解放されようと、マゾヒスティックにまで自由恋愛を追求する「痴人」を描いた。『春琴抄』は肉体的なマゾヒズムと官能美から東洋の神秘幽玄を見出だし、耽美的、夢幻の世界と伝統的な「永遠の女性」を追求する作品である。この作品集をきっかけに、2005年には葉渭渠著『谷崎潤一郎伝』が「20世紀外国古典作家伝記」として出版された。

2007年には鄭民欽訳『春琴抄』が翻訳された。翻訳者による序文「悪魔主義の盛会」では、文学の道徳功利性に反対し、「美」を芸術の本質とする谷崎文学の特徴を指摘した。さらに、谷崎作品の主題は女性崇拜であり、「往々にして女性の官能美の悦楽を追求することに耽溺して、病的なまで執着する」。「谷崎の作品には嗜虐とマゾヒズムの変態的な色彩が強いが、本能的性欲の描写が多く現れなかったため、美の純粋性と芸術の感染力が深まり、読者に性と美の力を感じさせた」と、初めて谷崎作品に見られる病的な性欲を肯定する。

この時期の特徴は様々な作風の作品が翻訳されたことである。翻訳者による序文には「社会批判意識」や「社会的役割」などの視点が見られなくなり、谷崎文学の文学的特質と芸術観だけに注目して、耽美主義の文学的特徴を客観的に反映している。そのうち、翻訳回数が

多い作品は『春琴抄』3 回と『陰翳礼讃』2 回で、特に『春琴抄』は代表作として高く評価された。

3.3.3 谷崎文学の研究

1994 年から現在に至るまで、谷崎研究を扱った研究には学術論文 82 本、修士論文 20 本、博士論文 1 本が公表された(CNKI による)。まず、谷崎作品のどの面が多く評価されているのかを考察するためにキーワード別に考察する。

1 番多いのは「中国との関わり」であった(36 本)。比較文学的視点から谷崎作品と中国の小説家の作品を比較分析した研究は郁達夫、田漢との比較を最も多く取り上げている。次に、谷崎をはじめ、日本の耽美主義が中国の現代文壇(創造社、獅吼社、田漢、白微など)に与えた影響を論じた研究がある。さらに、谷崎の 2 回にわたる中国旅行と「支那趣味」の作品を分析して、谷崎の作品における中国のイメージを扱った研究があった。以上の研究は殆ど中国の 20~40 年代に焦点が置かれ、日本の谷崎研究に欠けている領域である。2 番目に多いのは、谷崎の「耽美主義文学の特質」を論じた研究で(31 本)、複数の作品を取り上げて悪魔主義、マゾヒズム、女性崇拜、古典主義など谷崎文学の特徴を総合分析したものである。この類の研究は耽美主義が生まれた背景とともに、初期の悪魔主義、中期の古典主義、後期の悪魔主義に分けて各時期を代表する具体的な作品から解明するのがよくあるパターンである。初期の作品としては『悪魔』、『刺青』、『富美子の足』、『麒麟』、中期は『痴人の愛』、『春琴抄』、『細雪』、晩年期は『鍵』と『瘋癲老人日記』を多く取りあげている。この領域は日本における谷崎研究の成果を踏まえた論考が多い。3 番目は「女性崇拜、永遠女性」である(16 本)。谷崎の作品には常に魅力的で強い女性が登場し、男性はマゾヒスティックに思慕していくのであるが、その原因を母思い、女性関係から追求したり、「悪女」と「聖女」に分けて解明したりする。

次に、どの作品の研究が最も進んでいるのかを考察するために作品別に整理する。主に作品名が研究論文の標題もしくは副標題となって、作品を一作だけ扱った研究を対象とする。第 1 位は『細雪』(18 本)、第 2 位は『春琴抄』(17 本)、第 3 位は『刺青』(4 本)となる。『細雪』は三女の雪子を中心に蒔岡四姉妹のキャラクター、人物関係を解明し、雪子を谷崎の「永遠の女性」として論述に重きを置いた研究が中心である。『細雪』の単一の視点と異なって、『春琴抄』は女性崇拜、マゾヒズム、身分制度、比較文学など多様な視点から扱われている。『刺青』の代表的な研究にはトーテムを刺青する成人儀式と『刺青』の主人公とを関連付けたものがある。

この時期の研究論文は、20~30 年代を中心に中国との関係の視座にたった論文が多く見られ、扱った作品は『細雪』と『春琴抄』が最も多かった。80 年代のように社会的、教育的役割や資本主義批判の視点から論じたものは殆ど見られなくなり、作品の文学的特徴や芸術観に注目するようになった。興味深いことに、80 年代に多くの序文や研究で高く評価された『小さな王国』に触れた翻訳者と研究者は一人もいなかった。

4. 考察とまとめ

以上のように、谷崎文学の翻訳と受容を翻訳者の序文や研究論文を手掛かりに、中国の社会情勢や文学状況と関連付けて考察した。文学作品の翻訳と受容の仕方は受容国のコンテキスト、歴史、文学嗜好など文化的環境に影響されることが明らかになった。

谷崎作品の翻訳状況と解釈、評価も社会情勢と文学状況の変化に伴って、変化してきた。1928-1941年の間、租界として急速な発展を遂げた上海は国際的な大都会となり、耽美主義の拠点であった。この時期は『麒麟』や『富美子の足』など耽美主義的特徴のある作品を中心に翻訳され、翻訳者の評価も悪魔主義の独自性と特異性に注目し、中国の現代文壇にまで影響を与えた。改革開放直後の80年代は文芸と政治との関係をめぐる論争や左翼思潮の影響下で、耽美派の作品は容認されず、反戦作家として受け入れられた。さらに、資本主義批判や教育的役割を重んじて、社会的批判意識がある『小さな王国』と、反戦的で思想的に純潔な『細雪』が高く評価され、翻訳者の序文は殆ど当時の文学嗜好に合わせた解釈に書き換えられている。政治的環境がある程度開放的になった1994年以降は翻訳作品の多様化と評価の客観性が特徴的である。作品の分析は芸術観の側面から取り掛かり、耽美派作家としての谷崎が復帰するようになった。具体的な作品は谷崎文学の各要素が備わった『春琴抄』が多く翻訳、評価された。

さらに、同一作品でも時代によって解釈と評価の焦点が異なっていることが判明した。『痴人の愛』は男性を嗜虐的に扱ったり、男性を服従させようとする異常な女性を描いた傑作(章 1928)という評価から、二人の主人公はともに日本現代化過程において西欧化の風習がもたらした歪んだ心理を持つ病的な悲劇の人物である(郭他 1988)と批判的に捉える見方へ、さらには「痴人」が西洋風の女性の肉体に魅了され、束縛から解放されようと、マゾヒスティックにまで自由恋愛を追求する(葉 2000)との解釈に至る。春琴と佐助の師弟が一所懸命に三味線の芸に励む感動的な場面を描き、病的な心理描写は以て範とするに足らず(張他 1984)とされた『春琴抄』は、肉体的なマゾヒズムと官能美から東洋の神秘幽玄を見出だし、日本の伝統的な「永遠の女性」を追求する作品であるとされた(葉 2000)。さらに、露骨なポルノグラフィの描写で「道徳のはずれた滓」である(李 1983)とされた『鍵』と『瘋癲老人日記』は、後には「美の純粋性と芸術の感染力が深まり、読者に性と美の力を感じさせる」(鄭 2007)とポジティブに評価された。

全体で見ると、翻訳回数が多い順として、『春琴抄』8回、『麒麟』7回、『細雪』と『陰翳礼讃』が4回である。谷崎の文学的活動の三つの時期に対応させると、関西移住後、日本の古典美を発見する時期に書かれた、日本の伝統文化と関わる作品が高く評価され、受容されたようである。映画化された谷崎作品で、中国(中央テレビ局)で公開されたのは『春琴抄』と『細雪』の2作のみである。『麒麟』はおそらく中国文学との関係から注目されたようである。

.....

【謝辞】

本論文を執筆するに当たり、ご指導いただいた神戸大学国際文化学研究所の藤濤文子教授、並びに有益なコメントをいただいた査読者の方に深く感謝申し上げます。

【著者紹介】

尹 永順(いん えいじゅん)神戸大学国際文化学研究所博士後期課程在学中。中国電子科技大学日本語学部専任講師。中国における谷崎文学の翻訳と受容に関する研究に従事。

【注】

(1) 谷崎の中国語訳は解(1997)、銭(2002)、西原(2003)を参照。2010年に上海訳文出版社から『陰翳礼賛』、『瘋癲老人日記』、『卍』、『鍵』、『少将滋幹の母』の5作品の新訳が出版される予定である。『陰翳礼賛』(陳徳文訳)と『瘋癲老人日記』(竺家栄訳)は2010年6月にすでに出版されたが、本稿では割愛する。

(2) CNKI(中国知識資源総庫)は理工、社会科学、電子情報技術、農業、医学など様々な研究分野にわたる、刊行物(1979年-)、優秀博士修士論文(1999年-)、会議論文、新聞など学術、専門資料が収まった、中国最大の全文データベースである。

(3) 耽美主義思潮は19世紀後半にヨーロッパを中心として起こった文芸思潮である。当時の社会情勢は資本主義社会の矛盾が深化し、様々な社会問題を抱えていた。そこで、一部の作家と芸術家が芸術の商品化や功利性に反発して、「芸術のための芸術」、つまり善悪の倫理的価値を無視し、美を最高の価値として追求する芸術を提唱したのである。フランスのボードレールやイギリスのワイルドなどがその代表である。耽美主義と言えば、世紀末思潮、デカダンス(頹廢)、悪魔主義などの用語と比較されがちである。中国では一般に「唯美主義」と呼ばれるが、20~30年代には「頹加蕩」(英語の「decadence」かフランス語の「décadent」から音義を兼ねて翻訳されたもの)という巧みな訳語が作られたし、最近の研究では解(1997)や李(2000)のように「唯美-頹廢主義」と組み合わせる傾向もある。これらの思潮は必ずしも一致するとは限らないが、本稿ではほぼ同義として使用する。

(4) 永井(1911)からの引用。

(5) 中国文学研究者の間では、中国に耽美主義思潮の傾向が現れたのは認めるが、それが正真正銘の耽美派であったかどうかについては意見が分かれている。近年になって、解(1997)や李(2000)などは中国にも耽美派が確かに現れたと主張しているが、議論の余地があると考えられる。

(6) 筆者の調べでは『春琴抄』は中国で翻訳回数が最も多い日本文学作品である。

(7) 張(2007)は20~30年代を中心に中国全体を背景として捉えている。

(8) 日本語訳は拙訳による。以下特に断りのない限り、拙訳による。

(9) 魯(2005)参照。魯迅は『上海文芸之一瞥』(1931)において上海を基点として活動する創造社を含む文学団体を批判した。さらに、周作人宛ての手紙(1921年8月)にも、郭沫若や田漢のような人物を軽視すると書いた。

(10) 『上海交友記』において、日本の作家で最も広く知られているのは誰かという谷崎の質問に対して田漢、郭沫若らが答えたのがこの二人である。

(11) 満州国の新京(長春)で出版。詳しくは尹(2009)参照。

(12) 田漢の早期作品は耽美派作家(特に、谷崎の映画観)の影響を受けて芸術至上主義を主張していたが、日々悪化する社会情勢に迫られ、1930年に『従銀色之夢醒転来』や『我們的自我批評』を発表して、過去の文学主張を清算し(谷崎からの影響は「毒」であったと反省)、左連に参加して無産階級のための文学を提唱し始める。この翻訳はちょうどその左旋回を遂げた直後の1932年にある人物から依頼されたのである。さらに、谷崎と深い交際があったにもかかわらず、谷崎文学の翻訳が遅れたのは、「社会情勢の発展に伴い

中国青年の精力は全て社会変革に集中し、悪魔主義、芸術至上主義の作品は時代遅れの気がした」からであると自ら訳者序で述べた。

(13)『日本管窺の三』(1935)でも、『武州公秘話』の性的な他虐狂を描くところについて、周作人は「この部分は単に彼の変態の機嫌を語っているのだが、私は私なりに別の面白さを感じた。つまり首級に装束をすることの中にある文化に注目したのである」(木山英雄訳に拠る)。

(14)『冬の蠅』と『入厠読書』の引用は松枝茂夫訳に拠る。

(15)吉川幸次郎によって日本語に翻訳された豊子愷の『縁縁堂随筆』を谷崎が読んで『きのうきょう』という作品において、豊子愷は「随筆の上乗」、「芸術家書いたもの」、「別に為になることやむづかしいことなどを取り上げているのではないが、ほんのちょっとした話らないこと」を書くのが好きで、「子ども好き」な人であると評価した。1944年にその一部が夏丐尊によって『読縁縁堂随筆』という題で中国語に翻訳された。豊子愷はそれを読んで『読「読縁縁堂随筆」』で返答した。

(16)この視点は、文(1990)、彭(1992)などの研究者に引用された。

(17)この視点が王(2000)に引用され、中日戦争の間谷崎の行動と言論は軍国主義の「提灯持ち」になったと批判された。さらに、王(1999)では、かつて反戦、抵抗作家として知られる金子光星、石川達三などを取り上げ、日本には本格的な「反戦文学」や「抵抗文学」はないという結論が出される。

(18)後の新感覚派に比べて、明らかに耽美派の特質を有する一前言による。

(19)『小さな王国』を高く評価したのは、ほかに万(1982)、文(1990)、彭(1992)、『春琴伝』(張他1984)の序、『痴人之愛』(郭他1988)の序などがある。

(20)のち発禁とされるが、2009年に解禁。

(21)代表的作家には衛慧、棉棉など、代表作『上海ベビー』、『上海キャンディ』はのち発禁とされる。

(22)最初は5巻を予定していたが、『細雪』は著作権がすでにほかの出版社により取得されていたため、収録できなかった。葉(2005)序参照。

【引用文献】

- 浅井清・佐藤勝他(編集)(2000)『新研究資料 現代日本文学』第1巻 明治書院
- 蔡榕滨(2008)「谷崎潤一郎在中国的訳介」福建師範大学修士論文
- 陳玉剛(主編)(1989)『中国翻訳文学史稿』中国对外翻訳出版社
- 房向東(2007)『魯迅与他的論敵』上海書店出版社
- 豊子愷(1983)『読「読縁縁堂随筆」』『縁縁堂随筆集』浙江文芸出版社
- 藤井省三・大木 康(1997)『新しい中国文学史』ミネルヴァ書房
- 郭沫若(1989)「桌子的跳舞」『郭沫若全集』文学篇 第16巻 人民文学出版社
- 洪子誠(1999)『中国当代文学史』北京大学出版社
- 解志熙(1997)『美的偏至：中国現代唯美一類廢主義文学思潮研究』上海文芸出版社
- 小谷一郎・劉平(編)(1997)『田漢在日本』人民文学出版社
- Lefevere, Andre (1992) *Translation, Rewriting and the Manipulation of Literary Fame*. Routledge.
- 李 今(2000)『海派小説与現代都市文化』安徽教育出版社
- 李 芒(1983)前言『日本文学』第二期「唯美派特輯」吉林人民出版社
- 李運抔(2000)『中国当代小説五十年』暨南大学出版社
- 魯 迅(1931)『上海文芸之一瞥』『二心集』人民文学出版社
- 魯 迅(2005)『魯迅全集』第十一巻 人民文学出版社

- マンデイ、ジェレミー（2009）『翻訳学入門』鳥飼玖美子監訳 みすず書房
- 松枝茂夫（訳）（1938）『周作人随筆集』改造社
- 永井荷風（1911）「谷崎潤一郎氏の作品」『三田文学』11月号
- 孟昭毅・李載道（2005）『中国翻訳文学史』北京大学出版社
- 西原大輔（2003）『谷崎潤一郎とオリエンタリズムー大正日本の中国幻想』中公叢書
- 奥野健男（1974）「戦後文学における性意識の変遷」『国文学 解釈と鑑賞』第39巻14号
- 大塚幸男（1977）『比較文学原論』白水社
- 尾崎文昭（編）（2006）『「規範」からの離脱』山川出版社
- 彭徳全（1992）「試論谷崎潤一郎的美学観」『日語学習与研究』02期
- 銭曉波（2002）「中国における日本耽美主義文学研究の諸問題ー谷崎をその中心として」
『言語と交流』5巻 言語と交流研究会
- 邱明正（主編）（2003）『上海文学通史』上、下冊 復旦大学出版社
- 万 蘭（1982）「略談日本近現代短篇小説」『日本文学』創刊号 吉林人民出版社
- 鹿地亘（訳）（1952）『毛沢東の文芸講話』ハト書房
- 鈴木修次（1978）『中国文学と日本文学』東京書籍
- 谷崎潤一郎（1983）『谷崎潤一郎全集』第20、21、22巻 中央公論社
- 谷崎潤一郎（1992）『谷崎潤一郎』日本文学研究資料叢書 有精堂
- 唐 攷（編）（1986）『中国現代文学史』上巻、下巻 外文出版社（日本語部訳）
- 千葉俊二（編）（2002）『谷崎潤一郎必携』学燈社
- 中国研究所（編）（1987）『中国新时期文学の10年』中国年鑑別冊 大修館書店
- 王向遠（1999）「日本有「反戦文学」吗？」『外国文学評論』01期
- 王向遠（2000）『二十世紀中国的日本翻訳文学史』北京師範大学出版社
- 文潔若（1990）「唯美主義作家谷崎潤一郎」『日語学習与研究』01期
- 葉渭渠（2005）『谷崎潤一郎伝』新世界出版社
- 尹永順（2009）『『春琴抄』の二つの中国語訳に見られる翻訳方略と規範についてー記述的
翻訳研究のケース・スタディーとして』『通訳翻訳研究』9号
- 尹永順（2010）「中国における谷崎文学の翻訳と研究ー1980年代以降を中心に」立命館大
学主催国際会議『日本における翻訳学の行方』ポスター発表 1月9-10日
- 曾 真（2003）「谷崎文学在中国的訳介与研究ー以二十世紀八九十年代為中心」『湖南工程
学院学報』（社会科学版）01期
- 章克標（2000）『九十自述』中国文連出版社
- 張能泉（2007）「中国現代文壇对谷崎潤一郎の翻訳与接受」『日本学論壇』04期
- 張若谷（1931）『从囂俄到魯迅』新時代書局
- 趙 澧・徐京安（1987）『唯美主義』中国人民文学出版社
- 鄭万鵬（2002）『中国当代文学史』中山時子他翻訳監修 白帝社
- 周作人（1941）『日本近三十年小説之發達』『芸術与生活』上海西風社（影印）

周作人（2002）『日本談義集』木山英雄（編訳）平凡社

翻訳テキスト(年号順)

楊 騷（1928）『痴人之愛』上海北新書局

章克標（1929）『谷崎潤一郎集』上海開明書局

李漱泉（1934）『神與人之間』上海中華書局

陸少懿（1936）『春琴抄』上海文化生活出版社

儒 巧（1939）『春琴抄』滿州盛京時報

張 進・車向前・陳敏（1984）『春琴伝』湖南人民出版社

周逸之（1985）『細雪』湖南人民出版社

郭来舜・戴璨之（1988）『痴人之愛』陝西人民出版社

孫日明・陳競・梁守堅（1991）『乱世四姐妹』（『細雪』）広西民族出版社

葉渭渠（主編）（2000）『谷崎潤一郎作品集』4卷 中国文聯出版社

鄭民欽（2007）『春琴抄』北京燕山出版社